モダリティーとしての〈可能〉
— レアリティーと時間的な意味とのからみあい —

宮　崎　和　人

1．モダリティーの概念の再検討の必要性

モダリティーを〈発話時における話し手の心的態度〉あるいは〈主観性〉と規定し、客観的な事柄内容である〈命題〉との質的な区別や相互排他性を強調する議論を軸として、日本語のモダリティーの研究は発展してきた。その成果には目を見張るものがあるが、一方で、このアプローチによって、モダリティーの重要な性質が視野から抜け落ちてしまうように思われるのである。このアプローチの特徴は、アスペクトやテンスを命題の要素と考え、モダリティーから切り離してしまうことにある。チャールズ・フィルモアや益岡隆志らの初期の研究では、テンスはモダリティーの要素と考えられていたが、現在では、そのように考える研究者はいなくなってしまった。益岡も途中で考えを改めている。アスペクトやテンスとモダリティーの間に決定的な境界を設け、両者を異質なものとみることは、はたして妥当であろうか[1]。

過去・現在・未来の区別は、話す行為によって話し手の立場から定められるのであって、テンスは、出来事自体の属性ではありえない。また、テンスは、現実世界の出来事の確認のしかたである認識的ムードと一体であって、スル、シタは、非過去、過去のテンス形式であると同時に、叙述法・断定のムード形式でもある。アスペクトもテンスもモダリティーも、文の対象的な内容[2]と現実とのかかわりである〈陳述性〉（predicativity）を表現すべく、言語に発達したカテゴリーであって、これらは、意味的にも歴史的にも、きわめて密接な関係をもつ。これらは、三位一体であって、本来は、切り離して論じることができない。さらに、運動、状態、特性、質といった〈時間的限定性〉の違いによる述語の意味的なタイプは、これらのカテゴリーの分化の土台として、文の対象的な内容と陳述性を仲介している。

なお、用語の問題もある。テンスやアスペクトは形態論的なカテゴリーであるから、同じレベルの用語としては、モダリティーではなく、ムードを使用するべきである。また、モダリティーが構文論的なカテゴリーであることに合わせて、文レベルの事実を扱うときには、テンポラリティーやアスペクチュアリティーを使用することが、一般言語学的な見地からは必要になる。

さて、〈文の対象的な内容と現実との関係〉というモダリティーの規定は、〈陳述性〉の規定でもあって、そのままテンポラリティーやアスペクチュアリティーにもあてはまるが、区別が必要ならば、テンポラリティーやアスペクチュアリティーは、〈文の対象的な内容と現実との、

時間的な関係〉であると、断ることになる。だが、このようにして、モダリティーからテンポラリティーやアスペクチュアリティーを区別したとしても、モダリティーにはどこまでも時間的なものがつきまとい、切り離すことができない。たとえば、未来のことは直接確認できない。それは、話し手の予定として、想像として、決心として、期待として、命令として現れる。〈未来〉は、純粋に時間的な概念ではなく、モーダルなものとの複合のなかにしか存在できない。逆に、〈過去〉のことを予定、決心、期待、命令することはできない。知覚体験や観察にもとづく推定は、〈過去〉や〈現在〉という時間と不可分である。また、〈反復習慣〉も、純粋にアスペクチュアルな意味ではなく、ポテンシャルという点で、モーダルな側面との複合がある。

モダリティーは、テンポラリティーだけでなく、〈時間のなかでの文の対象的な内容の存在のしかた〉である〈時間的限定性〉ともからみあう。文の対象的な内容は、時間的限定性の観点から、〈運動〉〈状態〉〈特性〉〈質〉などの意味的なタイプに分類されるのだが、知覚体験できるのは、〈現象〉である〈運動〉〈状態〉であり、〈本質〉である〈特性〉〈質〉は一般化の判断によって確認される。〈運動〉〈状態〉〈特性〉〈質〉のすべてを推量することができるが、決心したり命令したりできるのは〈運動〉のみである[3]。

こうしたアプローチは、研究史的には、奥田靖雄の理論を工藤真由美が実践、発展させたという意味で、奥田・工藤モデルと呼ぶことができる[4]。このように、モダリティーを〈文の対象的な内容と現実との関係〉と規定することによって、テンポラリティー、アスペクチュアリティー、時間的限定性などの時間的なカテゴリーとの相関性・複合性という視点が生まれると同時に、様々なカテゴリーがこの視点のもとに検討の対象として浮かび上がってくる。その一つが〈可能〉である。

2．モダリティーとしての〈可能〉

日本語学では、ごく一部の研究者を例外として、〈可能〉をモダリティーのカテゴリーとしては認めていない。その理由としては、日本語では、「私は英語を話す」と「私には英語が話せる」のように、もとの文と可能文の間で主語が交代することから、可能文は、受身文と同様に、ヴォイス性をもつということがあり（ただし、「私は英語を話せる」のように、交代は義務的ではない）、そして、「読める」「読むことができる」のような〈可能〉の表現形式は、「読めた」「読むことができない」のように、過去や否定になることから、客観的であるとみなされるということがある。また、能力（ability）と認識的可能性（epistemic possibility）が同じ助動詞によって表現される英語などとは異なり、日本語では、この二つのカテゴリーの間での多義性がほとんど見られないことも、〈可能〉がモダリティーの議論のなかに入ってこなかった理由の一つであると思われる。それで、〈可能〉は、ヴォイスの周辺に位置づけられるにとどまっている。あるいは、カテゴリーとして孤立している。モダリティーを話し手の態度や主観性とする立場には、その受け皿がないのである。

モダリティーが〈文の対象的な内容と現実との関係〉であるならば、〈可能〉がモダリティー

であることには疑いがない。ただし、〈断定〉や〈推量〉などの主観的モダリティー（subjective modality）とは異なる。〈断定〉や〈推量〉が、話し手が現実とのかかわりのなかでつくりだしていく、〈文の対象的な内容としての出来事の存在のしかた〉であるとすれば、〈可能〉は、〈現実の世界の出来事の存在のしかた〉が文の対象的な内容のなかにうつしとられたものであろう。その意味では、〈可能〉は、客観的モダリティー（objective modality）である。さらに、伝統的なモダリティーの考え方にしたがうならば、〈可能〉は、孤立したカテゴリーではなく、レアリゼーションの観点から、〈現実〉〈必然〉とともにパラダイムをなしているということになる。この立場にたって、日本語の事実を体系的に記述してきたのは、奥田靖雄であった（奥田（1986、1996b、1999））。

現代日本語の可能表現の文には、（「話す」という動詞の形を例として示すと）「話せる」[5]「話すことができる」「話しうる」「話すこともありうる」「話してもいい」などがあり、それぞれが意味と機能において異なっている。次の節では、奥田（1986）の論旨を辿りつつ、代表的な可能表現の文である「することができる」や可能動詞を述語にする文における、〈可能〉と〈実現〉のレアリティーの対立について考える[6]。

3．可能表現の文におけるレアリティーの対立

〈可能〉をモダリティーとしてとらえるということは、文のレアリティーの問題を考えるということでもある。そのような視点をもつ可能表現の文の研究として、ここでは、奥田（1986）を取り上げる。

3．1．時間的限定性・テンポラリティーとの相関

代表的な可能表現の文である「することができる」や可能動詞を述語にする文が表現する〈可能〉には、〈能力可能〉と〈条件可能〉との二つのヴァリアントがあることが知られている。奥田（1986）も、この事実を認めることから出発しているが、彼の関心の中心は、むしろ、可能表現の文における、〈可能〉と〈実現〉というレアリティーの対立と移行の現象にあると思われる。

彼は英語をしゃべることができる。　　〈可能〉
彼はついに英語をしゃべることができた。〈実現〉

まず、〈可能〉が〈現実〉と対立するものであることを、奥田は次のように述べている[7]。

…動作・状態は物の特性であって、それが条件しだいでアクチュアルにはたらいたり、ねむっていたりするとすれば、《現実的なものとしての動作・状態》と《可能なものとしての動作・状態》との対立がおこってくるのは当然である。（P.185）

そして、〈能力可能〉を時間的限定性の観点から〈特性〉にひきつける。

…「かれは英語をしゃべる」ともいえるし、「かれは英語をしゃべることができる」ともいえて、《特性としての動作》が《能力としての動作》にきわめてちかいことをものがたる。(p.183)

しかし、以下に見るように、奥田は、あくまでも、レアリティー(実現と可能)と時間的限定性(アクチュアルとポテンシャル)を概念として区別する。区別したうえで両者の間に強い相関を認めるのである。

奥田は、「できる」の語彙的な意味に照らして、〈実現〉がもとの意味で、そこから〈可能〉へ移行したと考えている。さらに、この移行は、テンポラリティーと相関し、過去形よりも現在形で進行していることを指摘する。

「できる」という動詞は、もともと/うまれる、発生する、おこる、なりたつ/という語彙的な意味をもっていて、いまでもそのような意味でしばしばつかわれる。したがって、「することができる」というくみあわせは、そういう意味に解釈すれば、/これからの時間に動作がなりたつ/ということになるのだろう。じっさい、そこにさしだされる動作が、特定の時間を指定されている、いちいちの具体的なものであれば、**することができる**を述語にする可能表現の文は、もちろん文脈や場面にもかかわっているのだが、/可能/というよりも、むしろ/実現/をいいあらわしている。ところが、はっきりした時間的な規定をうけとらず、これからのある時間にとにかくなりたつことがあると、みなされる動作は、いまは可能性として存在しているということになって、**することができる**を述語にする文は、可能をいいあらわす文へ移行するのだろう。…一般的にいえば、/可能/をいいあらわす可能表現の文は、具体的な動作のもっている時間的な規定性はうしなっていて、ポテンシャルな動作をさしだしている。

このことを証明するごとく、現在のかたちの「することができる」のほうが、/可能/をいいあらわす文への移行を完成させていて、過去のかたちの「することができた」は、もともとの意味をつよくたもちつづけている。ここでは、おおくのばあい、/具体的な動作が過去の特定の時間にアクチュアルなものへ移行する/という/実現/をいいあらわしている。(p.187～188)

可能表現の文が表現する〈実現〉は、レアリゼーションにとどまらず、動作・状態のにない手の積極的な態度でもあるという重要な指摘がなされているということにも注目しておきたい。

…現実動詞「する」の過去のかたち「した」が/過去における動作・状態の存在/を表現しているとすれば、「することができた」は/過去における動作・状態の実現/を表現していて、動作・状態のあり方をレアリゼーションの観点から文法的に特徴づけている。

動作・状態の実現が文法的なかたちのなかにとりこまれるのは、そのような現象が現実に存在しているからにちがいないが、この実現は、ここでは、人間が動作・状態を意識的につくりだす、

ということとかかわっている。この種の文においては、動作・状態のにない手としてあらわれてくるのは、とくべつなばあいをのぞいて、つねに人間である。人間の動作・状態は、意識的であれば、のぞましいこととして、もくろむこととして、めざすこととして、あらかじめ頭のなかにえがきだされる。この期待し、意図する動作・状態が、実行にうつされて、レアルな存在へ移行するのだが、このような人間的な出来事が《実現》という用語でよばれるのだろう。じっさい、この用語は、／意図することが実行することで具体的なすがたのなかに存在するようになる／というような意味に、あるいは、／予定、構想、計画のなかにさしだされていることを現実の生活のなかにもちこむ／というような意味につかわれている。そして、「することができた」というかたちを述語にする文が、／実現／を表現しているとすれば、人間の動作・状態のこのような側面をきりとって、さしだしているのだろう。（p.193～194）

この論文で、奥田は、〈可能〉か〈実現〉かというレアリティーの区別に、〈過去〉か〈現在〉かというテンポラリティーの違いが深くかかわるということを強調している。と同時に、過去形が〈可能〉を表し、現在形が〈実現〉を表すといった、例外的な現象にも目を配り、この関係が絶対的でないことを指摘する。そして、レアリティーを決めるのは、本質的には、テンポラリティーではなく、〈アクチュアル〉か〈ポテンシャル〉かという時間的限定性の違いであると考えるようになる。疑いをさしはさみながら。

ところで、この「することができた」を述語にするとき、可能表現の文が《可能》を表現することがない、ということにはならない。動作・状態を実現することが、ある人にそなわっている特性としてさしだされると、その文は／可能／をいいあらわすようになる。この種の文では、動作・状態の実現は、レアルに存在する、いちいちの具体的な現象としてはえがきだされてはいない。このことは、なによりもまず、具体的な現象としての動作・状態の実現がもっている、時間的な規定性をうしなっている、ということのなかにしめされている。それがこの種の文を実現の表現から可能の表現へおしやる。過去という抽象的な時間の規定をうけてはいるが、その過去という時間のなかに、実現は現実性としてつねに存在しているわけではなく、かならず存在しているとすれば、可能性としての現実である。したがって、動作・状態は、実現する時間が具体的に指定されていなければ、特性としてポテンシャルに存在していることになるのだろう。これこそ能力である。そうであれば、期待とか意図とかいう意味あいもかけてくる。（p.197）

ところで、このように事実をみてくると、可能と実現との、意味のうえでの対立が、動作・状態をいちいちの、具体的な現象としてさしだしているか、それとも人にそなわっている特性としてさしだしているかという、文の意味的な性格のちがいに照応しているように思えてくる。そして、この照応が法則的であれば、「することができる」という、現在のかたちを述語にしておろうと、その可能表現の文は、いちいちの、具体的な動作・状態をさしだしているかぎり、／実現／をいいあらわしている、ということになるだろう。（p.199～200）

それにしても、「実現の意味あいをおびてくる」とでも、いいかえたほうがよさそうである。具体的な動作・状態が未来にかかわるときには、／可能／と／実現／とがひとつにとけあっているのだろうか？（p.205）

この問題に対する奥田の結論は、次のようなものである。

…「することができる」というかたちを述語にする可能表現の文とかかわって、その現在のかたちにおいては、可能あるいは不可能を表現しているが、その過去のかたちにおいては、実現あるいは非実現（不実行をふくめて）を表現していると、一般的な規定をあたえておいた。ところが、可能動詞を述語にする可能表現の文をしらべていくと、この一般的な規定がなりたたないようにみえてくる。むしろ、動作・状態が人あるいは物にそなわっている、ポテンシャルな特性としてとらえられているときには、可能表現としての文は可能あるいは不可能を表現しているし、いちいちの、具体的な現象として動作・状態がとらえられているときには、実現あるいは非実現を表現していると、規定するほうがより本質的であるように思われてくる。動作・状態がアクチュアルであるか、ポテンシャルであるかということは、文のtemporalityのなかにあらわれてくる。それとも、場面あるいは文脈が方向づける。まえの規定は現象をみているにすぎないのだろう。（p.208）

しかし、ぼくは、この原稿では、現在のかたちでは可能を表現し、過去のかたちでは実現を表現していて、対立物への相互移行は特殊化であるという、一般的な規定をもすてさることはできない。（p.208）

すなわち、レアリティーと時間的限定性の相関を本質的なものとみて、テンポラリティーとの相関は現象にすぎないとしながらも、テンポラリティーにもとづく一般化も捨てきれないでいるのである。

この論文から10年後には、奥田の迷いは解消している。「『ことばの科学』第7集の発行にあたって」という文章のなかで、奥田は、イェ・イ・ベリャエヴァの整理を参考にしながら、可能表現の文における、レアリティー、時間的限定性、テンポラリティーの関係を明快に整理している。

ベリャエヴァも《可能》を、それを条件づける要因にしたがって、まず《外的な要因による可能》と《内的な要因による可能》との、ふたつの意味的なタイプにわけるのだが、その意味的なタイプの、それぞれに《アクチュアルな可能》と《ポテンシャルな可能》との、ふたつのばあいのあることを指摘している。…《可能》がアクチュアルなばあいにかぎって、過去テンスのかたちをとれば、その可能動詞は／実現／を表現することになるのだが、…（p.13）

しかし、時間的なプランとは関係なしに、動作がアクチュアルなものであれば、可能動詞は／実現・実行が可能である／という意味を実現している、と規定すべきなのである。動作がいちいちの具体的なものであれば、過去、現在、未来という時間的なプランとは関係なしに、実現の可能性を表現している。(p.15)

〈実現の可能性〉の例としては、次のようなものを挙げている。

「なにかたべに出ましょうか。いまならば、出られますわ。」（洒落た関係）
「おれの方は27日で一応仕事がかたづく。28日なら、朝からでもたてるよ。」（氷壁）
ふしぶしはひどく痛みをおぼえながら、発作のすぎさった葉子は、ふだんどおりになって、おきあがることもできるのだった。しかし、葉子は、愛子や岡への手まえ、すぐにおきあがるのも変だったので、その日はそのままねつづけた。（或る女）

奥田(1986)では、レアリティーと時間的限定性とは直接的に相関し、レアリティーとテンポラリティーとは、テンポラリティーが時間的限定性と相関するということを通して、レアリティーと相関する、という関係でとらえられていたのだが、〈可能〉と〈実現〉の間に〈実現の可能性〉を新たに認めることによって、あらためて、この三つのカテゴリーの関係が体系的にとらえなおされたことになる。奥田の新しい考えは、次のようにまとめられるだろう。

レアリティー	時間的限定性	テンポラリティー
可能	ポテンシャル	なし(過去)
実現の可能性	アクチュアル	過去・現在・未来
実現	アクチュアル	過去

奥田は、レアリティーにかかわる三つの意味の歴史的な関係についても見通しを述べている。

…歴史的にみれば、実現から可能が、より正確にはアクチュアルな可能が派生してきたのだろう。このアクチュアルな可能が動作の具体的な、時間的なありか限定をうしないながら、ポテンシャルな可能へと移行していく。(p.16)

3．2．テンポラリティー・人称性・みとめかたとの相関

以上は、奥田(1986)の主要な論旨とその展開についてであった。基本的な図式は、上の表にまとめたとおりなのだが、可能表現の文におけるレアリティーの移行の条件に関する、以下のような観察も重要であると思われるので、箇条書きしておく。

①〈条件可能〉を表す「することができた」は習慣的・慣行的な動作・状態をさしだしている。さ

らに反復的な動作・状態をさしだす文になれば、〈可能〉と〈実現〉を区別できなくなる。習慣的・慣行的な動作・状態の例としては、「入札を形式的なものにしてしまって、事前に業者の談合をやっておけば、一社が事業を独占するようなことができないかわりに、順ぐりにまわされてきた事業からは、たっぷり利益をとることができたのだった」(金環蝕)などが、また、反復的な動作・状態の例としては、「ふところには二千五百ドル、九十万円ももっていたので、存分にあそぶことができた」(金環蝕)などが挙げられている。

②人称の一般化は、「することができた」における〈実現〉から〈可能〉への移行を促す。たとえば、「政治が法制制度的な面、あるいは哲学的、歴史的な面からだけ研究されているあいだは、政治学者はせまい城にたてこもっていることができた」(学問の動き)のような例。

③「することができなかった」を述語にする可能表現の文は、〈非実現〉というよりも、〈不実行〉を表現している場合が多い。たとえば、「死んだ雄鴨のそばをはなれずにいる雌鴨をみて、妻は涙をうかべた。夜があけた。しかし、ころした雄鴨をくうことはできなかった」(親鸞)のような例。

④その動作・状態が目の前に具体的なすがたで存在している場合でも、その動作・状態を可能動詞を述語にする可能表現の文でとらえていることがある。たとえば、「旦那さま一人でよくこんな家にすめるわね」(春の嵐)のような例。

⑤可能動詞が否定の現在形をとるときには、多くの場合、〈能力不可能〉や〈条件不可能〉ではなく、〈非実現〉を表現している。たとえば、「むずかしくて、かけないわ。才能がないのかもしれない」(洒落た関係)のような例。

4.「することもありうる」を述語にする文のレアリティー

可能表現の文には、「することができる」や可能動詞を述語にする文とは意味の異なる文として、「することもありうる」を述語にする文がある。このタイプの文は、もっぱら〈可能〉を表し、〈実現〉を表すことはなく、先行研究では、むしろ認識的モダリティーとの関係が問題になっているようである。このタイプの文については、いずれ詳細な検討が必要であるが、それについては別の論文を用意することとし、ここでは、レアリティーの問題に限定して、見通しを述べておきたい。

4.1. 先行研究

金子(1980)は、日本語の可能表現の形式を「話せる」(第一形式)、「話すことができる」(第二形式)、「話しうる」(第三形式)の三つに分類し、「ちからの可能」はいずれの形式でも表せるが、「民間企業は、つぶれることもありうる」のような「認識の可能」は、第三形式によってしか表せないとしている。さらに、「常識は変わりうる」などの例を挙げ、「認識の可能」を表す場合の第三形式は、しばしば「くりかえしのすがた(sporadic aspect)」を表すために機能しているように見えることがあると指摘している。そして、可能の第三形式だけでなく、述語となる単語

と組み合わさる「かもしれない」なども、「認識の可能」を表すための文法的な手段に属するとしているが、第三形式と「かもしれない」の違いについては、「一方が実際生活のうえの問題について使用されることがおおく、他方は論理的な問題について使用されることが多い、といった程度の差異にすぎないのだろうか」と述べるにとどまる。

森山(2002)や益岡(2007)は、「可能性」を表す形式として、「しうる」「する可能性がある」「かもしれない」などを取り上げ、比較している。両者の結論はほぼ同様であり、「かもしれない」が話し手のとらえかた(判断)としての可能性を表すのに対して、「しうる」「する可能性がある」等は可能性の存在を表すというものである。

筆者自身も、次のような趣旨のことを述べている(宮崎(2004))。「することがある」と「するかもしれない」とは、レアリティーあるいは時間的限定性の違いがきわだち、相互に置き換えられない。

この薬品に水を混ぜると、爆発することがある。　〈可能・特性〉
この薬品に水を混ぜると、爆発するかもしれない。〈現実・運動〉

一方、「することがある」には、「することもありうる」に置き換えうるものがある。たとえば、次の例は、「遅れることもありうる」でもよい。

——安田としては、じっさい、《まりも》で到着するのだから、河西をホームに来させるのが効果的である。それをさせなかったのは、飛行機には、天候や機材の関係で二時間も三時間も遅れることがあるからだ。(点と線)

そして、次の例のように、「することもありうる」は、「するかもしれない」とほぼ同じように使用されることもある。

…光秀は、先兵隊長として一軍のさきを進め、といった。その目的は、この一軍のなかで光秀の意図に気づき抜け駈けて本能寺へ内応する者があるかもしれない。また行軍の途次、在郷の者が時ならぬ大軍の行軍をあやしみ、本能寺へ速報することもありうる。それらをふせぐためであった。(国盗り物語)

つまり、存在論的な可能を表す「することがある」と認識的な可能を表す「するかもしれない」の間に「することもありうる」を位置づけ、意味の連続的推移を考えたのである。

以上のように、金子は、「しうる」と「するかもしれない」の同質性に注目し、森山、益岡は、両者の異質性を主張する。そして、筆者は、両者の連続性をとらえようとしている。

4．2．アクチュアル化の現象として

「することもありうる」という形[8]を述語にする文の性質で最も重要なのは、ここに含まれる「すること」は動詞の不定形であり、テンスをもたないということである。つまり、「したこともありうる」という形はない。この点が「するかもしれない」との決定的な違いである。このことは、「することもありうる」という形を述語にする文が具体的な場面から離れた一般的な出来事を描き出しているということを意味する。実際、次のような例では、主体が一般化されていて、〈ポテンシャルな可能〉に相当する意味が表現されている。金子が「認識の可能」であるとした、「民間企業は、つぶれることもありうる」も、一般主体であり、むしろ、〈ポテンシャルな可能〉の典型例であろう。

（あなたの登山の定義では、きのうぼくが雄山に登ったことは、登山ではないかも知れません。しかし、ぼく自身の登山の定義によれば、きのうの雄山登山は立派な登山です。ぼくにとっては、あれぐらいの風はたいしたことには思われないのです。危険とは感じないのです。山は立って登らねばならないという法則はないでしょう。時によれば、格好は悪いけれど這って登ることだってあり得るでしょう）（孤高の人）

…そして突如として米英と戦端を開いて以来、緒戦の相次ぐ戦果は、このすでに老境に達した一人の医師、院長業をもつ医学者を幼児のような昂奮の渦のなかに巻きこんだのであった。少なくとも彼は戦争には勝負があり、負けることもあり得るということを知ってはいた。「なんとしても負けてはならぬ!」というのが、開戦の報を耳にしたときの、真剣な、おし迫った彼の感慨でもあった。（楡家の人びと）

そして、これらの「することもありうる」を「するかもしれない」に置き換えることはできない。「するかもしれない」という形を述語にする文は、レアリティーの観点からは、〈可能〉ではなく、〈現実〉（の出来事に対する推量）を表現しているのである。

ところが、次のような例では、具体的な場面のなかで起こりうるという、〈アクチュアルな可能〉が表現されている。「することもできた」に近い意味を表現しているのである[9]。

「なるほど、河西を待合室に待たせた理由はそれでわかった。福岡署にはそのように依頼しよう。しかし、東京から安田自身が打たなくても、誰か、依頼をうけた代人が打つ、ということもありうるぜ」（点と線）

だが、「かもしれない」とは、まだ距離があるだろう。「打ったのかもしれない」と言い換えると、〈可能〉から〈現実〉に変わってしまう。この例は、あくまでも〈可能〉を表現していて、〈現実〉に近づいているように見えるのは、文脈のせいであろう。そもそも、過去のことに現在形が使われている。「という」が介在している点でも、特殊である。

だが、次のような例は、〈アクチュアルな可能〉が〈現実〉にかなり近づいていくことを教えて

いる（前の節で挙げた「国盗り物語」の例も参照）。

場所は初め、大臣官邸でという話だったのを、実松秘書官が、「それだけは止めていただきたい」と言い張ったため、航空本部の地下に共済組合の診療所がある、其処を使うこととし、実験は、数日間にわたって、或は徹夜になることもあり得るということであったが、徹夜なら山本は平気である。みんなのために、夜食の鮨など大きな鮨桶に山盛り用意させて、熱心なものであった。（山本五十六）

その罐詰はもとより、書物もカルテも数年来かき集めた貴重な資料の類も、もしかしたら駅に積まれたまま焼失して自分の手元にとどかぬこともあり得るという当然の可能性を、このとき久方ぶりに会った弟と酒をくみ交わしてほのぼのとなっていた徹吉は、さすがに考えることができなかったのであった。（楡家の人びと）

「するかもしれない」に完全に置き換えることができるかは微妙ではあるが、ここでは、「あるいは」「もしかしたら」といった、「するかもしれない」と頻繁に共起する陳述副詞が用いられていることにも注意したい。

以上、「することもありうる」という形を述語にする文にも、〈ポテンシャルな可能〉と〈アクチュアルな可能〉とがあり、後者は、〈現実〉（の出来事に対する推量）に連続していくことを見た。奥田の推定する、〈実現〉→〈アクチュアルな可能〉→〈ポテンシャルな可能〉という、「することができる」という形を述語にする文における意味の派生・移行とは逆のことが、ここでは起こっているということになるだろう。つまり、〈ポテンシャルな可能〉が出発点であり、それがアクチュアル化して〈アクチュアルな可能〉が派生し、徐々に〈現実〉（の出来事に対する推量）へと移行していくというプロセスである。

注

1 ただし、最近では、命題とモダリティーの境界を追求する議論は一段落し、カテゴリーの二面性・連続性を認める方向に変わりつつあるようでもある。益岡（2007）を参照。

2 奥田靖雄が使用している用語であり、文のなかにその内容として現れる出来事のことであるが、話し手によって積極的に意味づけられていること、モーダルな意味を伴わずには存在できないことが強調される点で、話し手から独立した客観的な事態と定義される「命題」とは意味合いが異なる。

3 テンポラリティーがあるのは、〈運動〉と〈状態〉であり、アスペクチュアリティーがあるのは〈運動〉のみであるというように、時間的限定性はテンポラリティーやアスペクチュアリティーとも密接にかかわる。

4 工藤（印刷中）は、このモデルによる研究の集大成である。

5 五段動詞では、「話される」のような、受け身動詞と同じ形の可能動詞の使用はきわめて限定的であるが、一段動詞では、「見られる」のような、受け身動詞と同じ形の可能動詞の使用が一般的であり、「話せる」に対応する「見れる」という形の使用は、話し言葉に限られる。

6 時間的限定性やエヴィデンシャリティーの場合もそうであるが、可能表現の文におけるレアリティーについても、形態論的な形式の存在という点で、標準語よりも方言に興味深い事実が観察される。宇和島方言の実現可能形式を記述した、工藤（2010）を参照。英語では、“could”と“was able to”とで、〈可能〉と〈実現〉が表し分けられることが知られている。

7 アクチュアルなものとポテンシャルなものとの対立・移行は、動作においても、特性と状態の関係において

も重要である。奥田（1988）には次のような記述がある。「また、動作は、抽象の程度に応じて、具体的に存在する、いちいちの、アクチュアルな動作としても、くりかえしておこってくる、反復的な動作としても、また習慣的な動作としても、あるいは能力としてもえがきだすことができる。時間のそとにとりだされて、一般化された動作としてもえがきだすことができる」「つまり、特性は物につきまとっている潜在的な特徴であって、その特徴がアクチュアルな現象へ移行するとき、状態へ移行するのである。具体的な時間へしばりつけられているということは、潜在的な特性が現実性へ移行したことにほかならない。ある物が、他の物と相互作用することで、みずからの特性をそとにさらけだすとき、その特性は状態として現象しはじめる。こうして、《特性》と《状態》とのあいだには、潜在と顕在との関係がみえてくる」

8 「することだってありうる」という形も含めてよい。

9 「することができた」といえば〈実現〉になるが、「することもできた」は〈アクチュアルな可能〉になるという傾向があるようである。

参考文献

奥田靖雄（1986）「現実・可能・必然（上）」『ことばの科学1』むぎ書房

奥田靖雄（1988）「述語の意味的なタイプ」琉球大学講義資料（『奥田靖雄著作集2 言語学編（1）』（むぎ書房、印刷中）に収録予定）

奥田靖雄（1996a）「文のこと―その分類をめぐって―」『教育国語』2-22

奥田靖雄（1996b）「現実・可能・必然（中）」『ことばの科学7』むぎ書房

奥田靖雄（1999）「現実・可能・必然（下）」『ことばの科学9』むぎ書房

金子尚一（1980）「可能表現の形式と意味（Ⅰ）―“ちからの可能”と“認識の可能”について―」『紀要』23、共立女子短期大学（文科）

工藤真由美（2004）「ムードとテンス・アスペクトの相関性をめぐって」『阪大日本語研究』16

工藤真由美（2010）「愛媛県宇和島方言の可能形式―努力による実現を明示する形式を中心に―」『国語語彙史の研究29』和泉書院

工藤真由美（2012）「時間的限定性という観点が提起するもの」『属性叙述の世界』くろしお出版

工藤真由美（印刷中）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房

益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版

益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探究』くろしお出版

宮崎和人（2004）「反復性と可能性―現代日本語のスルコトガアル―」『KLS』24、関西言語学会

森山卓郎（2002）「可能性とその周辺―「かねない」「あり得る」「可能性がある」等の迂言的表現と「かもしれない」―」『日本語学』21-2

付記 本稿は、平成24年度科学研究費補助金基盤研究（C）による研究成果の一部である。